



TITLE:

プラトンと形而上学(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

吉岡, 潔

CITATION:

吉岡, 潔. プラトンと形而上学. 京都大学, 1965, 文学博士

ISSUE DATE:

1965-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211431>

RIGHT:

氏 名	吉 岡 潔 よし おか きよし
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 12 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 40 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	プ ラ ト ン と 形 而 上 学

論文調査委員 (主 査)
教 授 田中美知太郎 教 授 野田又夫 教 授 高田三郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、プラトンのイデア論の最終的立場を、その晩年の著作ティマイオスのうちに認めようとするものであって、その鍵を、同著作のうちに語られているエイコース・ロゴス〔29C〕の解釈に求めんとするものである。著者によれば、プラトンのイデア説の出発点は、そのパルメニデス篇第一部に示された若きソクラテスのイデア説にある。これはエレア派のゼノンのパルメニデス擁護の論文に対する批判として展開される。しかし、これに対しては、パルメニデスによるイデア説の逆批判が展開され、ソクラテスのイデア説は尚未熟であることが示された。著者は、この叙述を重要視し、プラトンのイデア説の発展にはパルメニデス、ゼノンのエレア哲学に対する解釈が大いなる寄与をしているのではないかと考える。しかしながら、パルメニデス篇に於いては、イデア説は、ゼノンの方法による訓練を必要とするといわれるだけで、その後のいわば成熟せるソクラテスに対応するイデア説は示されていない。著者は、そこに於いて言われている「単にイデアを発見するだけでなく、これを更に他の人にも伝えることの出来る人のイデア説」がプラトン自身によって、その後に示されていなければならないと考える。そしてこれを、ティマイオス篇のうちに見出すことが出来るとする。著者は、ティマイオス篇に於いて、真実在としてのイデアと生成する現象界との関係が「パラディグマ」(原型)と「エイコーン」(写像)として示されるだけでなく、それに対応して、パラディグマのロゴスとエイコーンのロゴス、すなわちエイコース・ロゴスが語られ、この両ロゴスの間に類比の関係が成立つことに注目する。著者はヴィンデルバントの構成的カテゴリーと反省的カテゴリーの区別を導入し、イデアと現象界に対する新らしい意識の対応が語られているとする。そしてこの反省的カテゴリーにも対応する二つのロゴスの発見によって、これまでのプラトン哲学に於いては未だ到達されていなかった新らしい見地が得られたとする。イデアと生成界とのほかに、コーラー(場所)が考えられるようになるのは、この新らしい見地によるのである。

著者はこのエイコース・ロゴスという用語について、三つの意味を区別する。ひとつは蓋然的という意味であり、ひとつは理にかなったという意味であり、更に第三には分に従うという意味を認め、むしろこ

の第三の意味のもとに、第一、第二の意味が包括されるとする。そして、これは、ソクラテスが無知の知に於いて発見した人間の分という考えから発展したものであるとする。更にプラトンの想起説についても、単に感覚から知識、あるいは思いなしから知識へという連続的發展ではなく、エイコース・ロゴスから他の真なるロゴスに至るばあいのごとき意識の転換がなければならないとする。また、イデア界の構成については、ティマイオスの宇宙論を、ひとつのエイコース・ロゴス、すなわち写像のロゴスとすることによって、逆にイデア界の天文学的構成を持つのではないかと考える。そのイデアの構成は、例えばポリティア「国家篇」にいられている純理論的な天文学に対応するがごときものであるといわれる。そして善というようなものも、その秩序としてみられる。著者は、かくのごとくして、ティマイオスに於けるプラトン・イデア論の最終的立場と解されるものから、プラトン・イデア論の各種の問題について独自の解釈を与えている。

論文審査の結果の要旨

プラトンのイデア説については、古来既に幾多の解釈がある。またそれについての種々の批評がある。幾つかの問題点は各方面から色々に取り扱われているが、なお未解決のものが少くない。著者はプラトンによってプラトンを理解するという立場を取りながら、先行哲学者としてのパルメニデス・ゼノン・ソクラテスに対するプラトンの解釈というものを重視し、それらの関連においてイデア説の基本問題にひとつの解釈を与えようとしている。それは、著者自身に於いて既にひとつのコンシステンシイを持つ体系のごときものとして定着され、一種独特の世界を形成している。しかしながら、プラトンのテキストそのものについてみれば、エイコース・ロゴスの三つの意味、あるいは、パルメニデス篇第一部のソクラテスとゼノンの問答などについて、著者の解釈は必ずしも妥当であるとは言えない。文献学的には、なお他の多くの資料に基づいて、充分な証拠固めをしなければ、簡単に結論することは出来ない。また著者がヴィンデルバントその他の用語を導入することについても、果して適切であるか否かについては議論の余地が少くない。しかしながら一個の哲学的解釈として著者がここに試みている解釈の努力は、プラトン解釈のひとつの可能性を開拓したものとして意義なしとしない。著者は各種のプラトン関係の文献を広く読むとともに、ライプニッツ、カント、フッセルその他の哲学者についても、およそ自己の解釈に関係のあるものを広く勉強しているので、その点の努力も多としなければならないであろう。

よって本論文は文学博士の学位論文としての価値あるものと認める。